三種類の人が実践する覚りへの道のプロセスについての小論
[A1] 法の起源が優れていることを示すために〔元になる『菩提道灯論』の〕作者（アティシャ）の偉大さを示す
[B1] 全てを備えた家柄に生まれようとお望みになった様子
[B2] その身に優れた性質を身に付けていった様子
[B3] 〔優れた性質を〕身に付けてからから〔仏教のために〕なすべき仕事をなさった様子
[C1] インドで〔仕事を〕なさった様子
[C2] チベットで〔仕事を〕なさった様子
[A2] 実践的な教え（gdams ngag）に対して尊敬を生じさせるために法の偉大さを示す
[B1] 〔仏教で〕説かれたこと全てが矛盾することなく理解されるという偉大さ
[B2] 仏説（gsung rab）全てが実践的な教えとして身に付くという偉大さ
[B3] 勝者（仏陀）の真意が簡単に身に付くという偉大さ
[B4] 大きく誤った行が自然に消滅してしまうという偉大さ
[A3] 二つの偉大さ（作者の偉大さと説かれた内容の偉大さ）を備えた法をどのように講義・聴講するか
[A4] 実践的な教え（gdams pa）によって弟子をどのように導くかというプロセス
[B1] 道の根本である師に帰依する仕方
[B2] 〔師に〕帰依したのち、どのように知恵を養うかというその順序
[C1] 〔仏教を学ぶ〕時間的余裕のある環境を効果的に活用するよう勧める
[C2] 〔時間的余裕を〕どのように効果的に活用したらいいか
[D1] 一般的に道の諸規定について確信を生じさせる
[E1] 三種類の人の〔歩むべき〕道に仏説（gsung rab）の全てが含まれている様子
[E2] 三種類の人〔を設定すること〕して〔その〕プロセス通りに〔覚りへと〕導く理由を示す
[D2] それを効果的に活用する仕方の本論
[E1] 小人物と共通の道のプロセスを通して意識を養う
[F1] 小人物の考えを養うことの本論
[G1] 来世を求める意識を生じさせる
[H1] この世に長い間留まることができないこと、すなわち死を思う
[H2] 来世にどのようになるか、〔善悪の二〕趣における楽と苦とを考える
[G2] 来世において安楽になるための手段を活用する
[H1] 仏教に入門するための最上の入り口である帰依の実践
[H2] 一切の幸福（bde legs）の根本である信頼する心を生じさせる
[I1] 行為とその結果一般についての考察
[J1] 一般的な考え方
[K1] 行為〔の善悪に従って結果の楽苦が〕確定していること
[K2] 行為〔の結果〕が増大すること
[K3] 行わなかった行為〔の結果〕が出来することはない
[K4] なした行為〔の結果〕が無駄に無くなることはない
[J2] 分類して考える
[I2] 特定のテーマについての考察
[I3] 考察をしたのち、行うべき行為と回避すべき行為について
[F2] その考えが生じたと判断できる基準
[F3] それについての誤解を取り除く
[E2] 中人物と共通の道のプロセスにおいて意識を浄化する
[F1] 〔解脱を求める〕考えを育むことの本論
[G1] 解脱を求める意識を確認する
[G2] それを生じさせる方法
[H1] 苦諦すなわち輪廻の災い（nyes dmigs）を考える
[I1] 苦諦を四諦の最初にお説きになった真意を示す
[I2] 苦についての瞑想の本論
[J1] 輪廻一般の苦を考える
[K1] 八苦を考える
[K2] 六苦を考える
[J2] 個別の苦を考える
[K1] 三悪趣（畜生、餓鬼、地獄）の苦を考える
[K2] 人の苦を考える
[K3] 阿修羅の苦を考える
[K4] 天の苦を考える
[H2] 集諦すなわち輪廻が成立する次第について考える
[I1] 煩悩が生じる様子
[I2] それによって業を積む仕方
[I3] 死んでからふたたび生を受ける様子

[F2] それが生じたと判断できる基準
[F3] それについての誤解を退ける
[F4] 解脱へと歩んでいく道の本質を確定する
[E3] 大人物の道のプロセスにおいて意識を浄化する
[F1] 大乗に入る入り口は発菩提心のみであると示す
[F2] その心を生じさせるやり方
[G1] 菩提心を養う順序
[H1] アティシャから伝わったもののうち、因果の七つの秘訣
[H2] シャーンティデーヴァ菩薩の典籍に見えることに基づいて行じる
[I1] 自他を交換することと交換しないことの利益と不利益を考える
[I2] その心に習熟したならば〔菩提心を〕生じることができると示す
[I3] 自他を交換する仕方を瞑想する順序
[G2] 〔菩提心が〕生じたと判断できる基準
[G3] 儀軌によって〔菩提心を〕維持する仕方
[H1] まだ〔発願心を〕得ていないものに〔発願心を〕得させる
[H2] 既に得た〔発願心を〕衰えさせずに維持する
[H3] もし衰えたら再生させる方法
[F3] 発菩提心ののち、〔訓練項目について〕訓練する方法
[G1] 菩提心を生じたのち、訓練項目について訓練しなければならない理由
[G2] 方便と智慧を別々に訓練ことによっては仏陀になることはできないと示す
[G3] 訓練項目を訓練する次第を説明する
[H1] 大乗一般について訓練するやり方
[I1] 菩提心の訓練項目について訓練したいという気持ちを養う
[I2] それを養ってから菩薩戒を受ける
[I3] 〔菩薩戒を〕受けたのちどのように訓練するかというそのやり方
[J1] 何について訓練するのか
[J2] それに諸々の訓練項目が集約される様子
[J3] それについて訓練する順序
[K1] 行一般について訓練するやり方
[L1] 自らの仏陀の性質を成熟させる波羅蜜について訓練する
[M1] 布施について訓練する仕方
[M2] 戒律について訓練する仕方
[M3] 忍耐について訓練する仕方
[M4] 精進について訓練する仕方
[M5] 禅定について訓練する仕方
[M7] 般若について訓練する仕方
[L2] 他のものの心を成熟させる四摂事について訓練する
[K2] 特に最後の二つの波羅蜜について訓練する仕方
[L1] 精神集中と分析的瞑想を修習することによる利益
[L2] その二つが全ての三昧を集約するものであると示す
[L3] 精神集中と分析的瞑想の本質
[L4] 両方とも修習する理由
[L5] 次第を確定する仕方
[L6] それぞれの訓練の仕方
[M1] 精神集中について訓練する仕方
[M2] 分析的瞑想について訓練する仕方
[N1] 分析的瞑想の資糧に依る
[O1] 分析的瞑想の資料に依る仕方の一般論
[O2] 特別に見解を確定する仕方
[P1] 煩悩性の無明を確認する
[P2] それが輪廻を廻る根本〔の因〕であると示す
[P3] その我執を断ち切りたいと望むことによって無我の見解が求められる
[Q1] 無明を断ちたいと望むならば無我を理解する見解を求めなければならない理由
[Q2] 無我を理解する見解を生じさせるやり方
[N2] 分析的瞑想の分類
[N3] 分析的瞑想を修習する仕方
[N4] 修習したことによって分析的瞑想が成立すると言える判定基準
[M3] 精神集中と分析的観察を一緒に関連させる仕方
[H2] 得に金剛乗について訓練するやり方